

## ＜ショートレポート＞

### ワークシートと映像コンテンツを活用した部活動の実践研究

関西大学人間健康学部教授 神谷 拓  
ベネッセコーポレーション 平澤 実

#### 1. 研究目的

本研究の目的は、生徒主体の自治集団活動を促進する目的で開発された、運動部活動のワークシート（Club Intelligence Work-sheet：CIW）と映像コンテンツ（Club Intelligence Seminar：CIS）を活用することで、実際の運営や生徒の意識において、どのような変化が生じるのかについて明らかにすることである。

CIW とは、部活動運営の方針や競技目標とともに日々の運営で生じる課題を、生徒主体で解決するために作成されたワークシートである（本レポートの最後に掲載）。そこでは、部活動運営で生じる課題が 21 項目に整理されているが、これらの項目は、地域スポーツクラブの実践において生じる課題をふまえて設定されたものである。具体的には、日本スポーツ協会（2017 年 3 月 31 日まで日本体育協会）と新日本スポーツ連盟（1995 年 11 月 12 日まで新日本体育連盟）の機関誌から、地域のスポーツクラブ実践の取り組みや課題に関わる内容が掲載されている記事・論稿を抽出するとともに（合計 653 本）、それらの中から実践で生じている課題をコーディングし、部活動の運営場面を想定して表現し直したものである。このような手順を踏んで開発されているため、シートに記されている課題解決の経験を積み重ねることは、学校卒業後に自分達でスポーツクラブやサークルをつくったり、中学校、高等学校の学習指導要領の保健体育科の目標で示されている「豊かなスポーツライフ」に接近したりする意味を持つ。しかし、現実の運動部活動の実践においては、リストにあるような課題を生徒主体で解決する部活動は少なく、佐々木（2018）及び神谷（2020c）の調査によれば、「生徒（だけ）で解決する」と回答された割合は、多くの項目において 10%未満であった。

このような実態をふまえて、神谷は宮城県塩竈市教育委員会と連携して、CIW を用いたワークショップ（中学校）に取り組んだ。それは、校内における各運動部活動の生徒の代表、顧問、保護者の代表、外部指導者・部活動指導員が一堂に会して行われ、現状の組織運営の目標や競技目標を確認すると同時に、CIW にある 21 項目の組織運営の課題を「現時点で解決している」のは誰かを議論し、○をつける作業が行われた。その後、同様に「これからは誰が解決するのか」を話し合い、矢印で移動させていく作業にも取り組まれ、最終的には参加者全員で CIW に記された方針を確認して、およそ 1 時間で終了している。このような取り組みの結果、実践校においては、子どもの自治集団活動が促されるなどの成果が見られたという（塩竈市教育委員会 2018、2019）。

この CIW を用いて自治集団活動を促していく方法は、日本部活動学会においても「神谷メソッド」として紹介されたが（神谷 2018a,b）、CIW を作成した神谷が直接関わるようなワークショップや研修などでは一定の成果が確認できるものの、それ以外の場合（神谷不在の場合）において同様の成果が得られるのかは検証されていない。そこで本研究では、CIW

を解説する映像コンテンツである CIS を作成することで、神谷不在の状態においても、CIW を用いて自治集団活動を推進することができるのかについて調査することにした。なお、CIS は、指導者が事前に視聴する「指導者パート」・3 クリップ（28 分 38 秒）と、生徒と指導者が一緒に視聴する「生徒・指導者パート」・22 クリップ（68 分 22 秒）に分けられており（表 1）、生徒による課題解決を促す内容になっている。以下では、このような CIS と CIW を活用することで、実際の運営や生徒の意識において、どのような変化が生じるのかについても明らかにしていく。

## 2. 実践研究の方法

本実践研究は、2019 年 11 月～2020 年 3 月までの期間において取り組んだ。調査対象校と人数を示したのが表 2 であり、CIW はそれぞれの部活動から 1 枚ずつ回収している。調査を進めるにあたって、まず、実践校において①調査の目的や方法と、個人情報の取り扱い等について説明した。その際には、教師側の事前準備として「複

数の顧問がいる場合は、CIS を全員が視聴すること」を求め、CIW を用いたワークショップ当日においては、「教師側で必要以上に議論を誘導しすぎず、ファシリテートしていく」ことを求めた。そして、CIW 作成後においては、教師が安全管理や学校のルールを順守することを指導しつつ、CIW に基づく実践を 1 ヶ月以上行うことを求めた。次に、②ワークショップに取り組む前に、生徒にプレ・アンケートに答えてもらった。なお、ポスト・アンケートも質問項目は同じであり、その内容は表 3-1、3-2 の通りである。

その後、③CIW と CIS を活用したワークショップに取り組んでもらった。CIS は、実践

表 1 CISの構成と時間

視聴分類	タイトル		分：秒
指導者パート	A01	セミナーについて	8:45
	A02	ワークシートを用いる意義	8:44
	A03	ワークシートの利用方法	11:09
生徒・指導者パート	B01	このセミナーについて	5:15
	B02	組織の目標を決める	5:45
	B03	競技目標を決める	2:12
	B04	ワークシートの使い方	2:18
	B05	ワークシートNO. 1	1:31
	B06	ワークシートNO. 2	1:41
	B07	ワークシートNO. 3	1:40
	B08	ワークシートNO. 4、15	2:19
	B09	ワークシートNO. 5	2:10
	B10	ワークシートNO. 6	2:11
	B11	ワークシートNO. 7、8	2:34
	B12	ワークシートNO. 9、10	4:13
	B13	ワークシートNO. 11	2:25
	B14	ワークシートNO. 12	2:21
	B15	ワークシートNO. 13、14	7:40
	B16	ワークシートNO. 16	4:05
	B17	ワークシートNO. 17	2:47
	B18	ワークシートNO. 18	2:01
	B19	ワークシートNO. 19	1:57
	B20	ワークシートNO. 20	3:06
	B21	ワークシートNO. 21	3:38
	B22	ワークシート作成後に大切なこと	4:33

表 2 調査対象校と人数

高校名略称	公立・私立	部活動の名称	生徒数	教員数
TN	公立	男子ソフトテニス部	21	2
KH	私立	女子バレーボール部	23	2
		男子硬式野球部	40	1
		ハンドボール部	30	1
合計			114	6

校の要望に応じて iPad にダウンロードしたものを視聴する方法と、YouTube において視聴する方法を用いた。実践校では、CIS の各クリップを視聴した後に、教師と生徒で議論し、CIW を埋めていった。ワークショップ終了後、④作成された CIW に基づく運営を 1 ヶ月以上継続した後、⑤教師と生徒にポストアンケートに回答してもらった。

本研究では、このような手順で集められたデータを分析していく。具体的には、まず、(1) CIW の変化を分析し、今回の実践研究が 21 項目の運営上の課題解決において、どのような変化があったのかに注目する。次に(2)生徒に対して実施した、プレ・ポストのアンケートを比較することで、今回の実践研究の成果を定量的に分析する。

表 3-1 プレ・ポストアンケート  
(あなたが所属している部活について、最も近いものを選び各行の数字に○をつけてください。)

<設問>	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	とてもあてはまる
生徒間のコミュニケーションはうまくいっている	1	2	3	4	5
顧問とのコミュニケーションはうまくいっている	1	2	3	4	5
自分の意見や考えを述べる機会がある	1	2	3	4	5
部員の1人として所属している実感がある	1	2	3	4	5
部活動で生じる課題を自分たちで解決している	1	2	3	4	5
先生は部員の考えを理解している	1	2	3	4	5
部員は先生の考えを理解している	1	2	3	4	5
目指す目標が全員で共有できている	1	2	3	4	5
試合・コンクールなどの成績に満足している	1	2	3	4	5
部活の場で成長できている実感がある	1	2	3	4	5
部員が皆、自律的に行動できている	1	2	3	4	5
社会で役に立つ力が身についている実感がある	1	2	3	4	5
部活動全体に満足している	1	2	3	4	5

表 3-2 プレ・ポストアンケート  
(あなたが日頃の学習で心がけていることについて、最も近いものを選び各行の数字に○をつけてください。)

<設問>	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	とてもあてはまる
何から学習をしたらよいか順番を考えるようにしている	1	2	3	4	5
計画や目標を決めて学習するようにしている	1	2	3	4	5
学習の計画がうまく進んでいなければ見直すようにしている	1	2	3	4	5
重要なところがどこかを考えて学習するようにしている	1	2	3	4	5
習ったことどうしの関連をつかむようにしている	1	2	3	4	5
ただ暗記するのではなく、理解して覚えるように心がけている	1	2	3	4	5
テストでできなかった問題は、あとからでも解き方を知りたい	1	2	3	4	5
なぜそうなるのかわからなくても、答えがあっていれば良いと思う	1	2	3	4	5
なぜそうなるかはあまり考えず、暗記してしまうことが多い	1	2	3	4	5
何が分かっているかを確かめながら勉強をするようにしている	1	2	3	4	5
答えを出すだけでなく、考え方があっていかが大切だと思う	1	2	3	4	5

### 3. 調査の結果

#### 3.1 CIW 上の変化

まず、CIW に記載された「これまでの課題解決の主体」(○)と「これからの課題解決の主体」(●)の変化について分析する(表4)。

全体 84 項目(CIW・21 項目×4 校)のうち、36 項目(42.9%)において課題解決の主体に変化があり、48 項目(57.1%)において変化がなかった。「変化なし」の詳細を見ると、

表4 CIWにおける課題解決の主体の変化

変化のカテゴリー	個別変化(○→●)のパターン	個別変化(%)	変化のカテゴリー%
生徒参加	教師⇒生徒・教師	25 (29.8%)	36.9%
	生徒・教師⇒生徒	3 (3.6%)	
	全員⇒生徒	1 (1.2%)	
	教師⇒全員	1 (1.2%)	
	指導員⇒全員	1 (1.2%)	
大人間の変化	生徒・指導員⇒生徒・教師	1 (1.2%)	1.2%
大人参加	生徒・教師⇒全員	1 (1.2%)	4.8%
	生徒⇒生徒・教師	2 (2.4%)	
	生徒・教師⇒教師	1 (1.2%)	
変化なし(大人のみ)	教師	20 (23.8%)	23.8%
変化なし(生徒参加)	生徒・教師	16 (19.0%)	33.3%
	生徒	11 (13.1%)	
	生徒・指導員	1 (1.2%)	
総計		84 (100.0%)	100%

既に生徒が課題解決の主体として加わっていた項目が 33.3%あり、これらは積極的に変える必要がなかったとも言える。次に、変化があった内容について詳しく見ると、①新たな課題解決の主体として生徒が加わったり、これまでよりも生徒が主導権をもったりする「生徒参加」パターン(36.9%)、②教師から部活動指導員・外部指導者のように課題解決の主体が変化する「大人間の変化」パターン(1.2%)、③新たな課題解決の主体として教師や部活動指導員・外部指導者が加わったり、これまでよりも大人が主導権をもったりする「大人参加」パターン(4.8%)に大別できる。これらの結果から、今回の実践研究が、生徒を部活動の運営に参加させ、課題解決の主体としての行動を促す契機になったことがうかがえる。とりわけ、これまでは教師のみで意思決定をしていた部活動の課題に、生徒が参加することを促す傾向が見て取れた(29.8%)。なお、この結果は、前掲の塩竈市における実践(2018, p. 24)と同様の傾向を示しており、そこでは①教師のみの課題解決の項目が減少し(52.4%⇒40.5%)、②生徒と教師で解決する項目が増え(24.6%⇒31%)、③生徒だけで解決する項目も増えていた(17.9%⇒25.0%)。このことから CIS を活用した実践は、神谷が直接ワークショップに取り組むのと同様の成果が得られることがわかった。

#### 3.2 プレ・ポストアンケートの比較

本調査では対比較を行い、「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「とてもあてはまる」の 5 つの回答の変化をみた。分割表を用いた解析となり、解析手法には「Bowker の検定」を用いた。解析は SAS 社の JMP Pro 14.3.0 を用いて行った。統計学的有意水準は、5%とした。なお、対象者数が少ないために、一部

のセルにおける観測度数が極端に小さくなることを観察した。解析に影響をあたえることから、回答カテゴリを適宜合わせた形（例：「あてはまらない」「あまりあてはまらない」の回答数を合わせるなど）で解析を行った。その結果、いずれの質問項目においても、プレ・ポスト間で統計学的に有意な変化は認められなかった。

#### **4. 今後の課題**

今回の調査においては、CIWを開発した神谷が不在の状態でも、CISを用いたワークショップに取り組むことで、子ども主体の自治集団活動を促す契機になることが明らかになった。しかし、生徒の意識の変化に関しては、確認することができなかった。このような結果になった要因として、年度途中の2019年11月～2020年3月の短期間の調査だったことが考えられる。次の調査においては、年度の初めから、もしくは代替わりが行われる夏季大会後から少なくとも半年間は実施する必要があると考える。また、本実践研究で活用したCISやCIWが、部活動指導に関わる教師の負担感軽減に、どのような影響を及ぼしたのかについても検証していく予定である。

クラブ・インテリジェンス・ワークシート(CIW)

関西大学・神谷拓

みんなで部活動運営のガイドラインをつくろう！ \_\_\_\_\_ 部 記入日：\_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日

作成者 教師名 \_\_\_\_\_ 子どもの代表者名 \_\_\_\_\_ 部活動指導員・外部指導者名 \_\_\_\_\_ 保護者の代表者名 \_\_\_\_\_

①部活動を運営していくうえでの方針を決めよう！ (組織を運営していくうえでの約束事や心構えについて記しましょう。 みんなが覚えられるように、簡潔に・短く書くことがポイントです！)	→ 私たちの運営の方針は _____  です！
②競技成績の目標を決めよう！ (昨年度の取組みと成績を参考にして、みんなで現実的な目標設定をしましょう！)	→ 私たちがめざす競技成績は _____  です！

- ③部活動の運営方法を決めよう！
1. 下のNO.1～21には、部活動を運営していくうえで生じる課題が整理されています。これらは、学校を卒業した後に、地域社会でクラブを運営する際においても課題になります。卒業後もスポーツや文化活動を続けていける力を身につけるために、日頃の部活動の運営においても、できるだけ生徒・部員自身が課題に取り組むようにしましょう。
2. NO.1～21の項目を1つずつ確認し、現状において解決している人に○をつけましょう。次に、これからの部活動において、誰が解決するべきかをみんなで検討し、●をつけましょう。○と●を矢印(→)で結んでください(下の例を参照)。NO.1～21以外の課題があれば、NO.22～25の欄に書き足してください。
3. なお、議論をする際には、スポーツ庁と文化庁のガイドライン(活動時間は、長くても平日2時間程度、休日は3時間程度。休養日は平日に1日休み、土・日の週末で1日以上休む[計2日以上]の休養日))の方針を参考にすると良いでしょう。
4. 最後に、全体を読み直して、これから誰が、何を解決するのかを確認して、みんなで共有して下さい。みんなで決めたことを、みんなで守ることが大切です。もし、不都合が生じたら、再び、みんなで集まって修正をしましょう。

NO	課題	教師が 決める・解決する	生徒が 決める・解決する			部活動指導員・外部指導者が 決める・解決する	左の三者(教師、生徒、部活動指導員・外部指導者)の全員で決める・解決する	保護者に 頼む・依頼をする
			生徒と教師で決める	生徒だけで決める	生徒と指導員で決める			
例	□□□□について解決するのは誰か？	○ → ●						
1	大会・試合・コンクールなどのルール・規則を調べるのは誰か？							
2	試合・公演などに使う戦術・作戦・プランを決めるのは誰か？							
3	練習の内容を決めるのは誰か？							
4	練習試合・合同練習の相手を決めるのは誰か？							
5	出場する大会・コンクールを決めるのは誰か？							
6	VTR分析などを通してチーム・クラブの課題を示すのは誰か？							
7	大会・試合・コンクールなどに出場するメンバーを決めるのは誰か？							
8	大会・試合・コンクールなどに向けて、ポジション(個人競技の種目を含む)やパートなどを決めるのは誰か？							
9	キャプテンを決めるのは誰か？							
10	キャプテン以外の役割・係を決めるのは誰か？							
11	部活動運営の細かな規則を決めるのは誰か？ (①で決めた方針以外の規則・約束事を決めるのは誰か？)							
12	部員・メンバーの募集をするのは誰か？							
13	練習の日程、時間、場所を決めるのは誰か？							
14	ミーティングの日程、時間、場所を決めるのは誰か？							
15	試合(練習試合・合同練習)の日程、時間、場所を決めるのは誰か？							
16	部活動に必要な予算を計上するのは誰か？							
17	予算の支払いをするのは誰か？							
18	用具の準備や管理をする(掃除を含む)のは誰か？							
19	部内の連絡をする伝達方法を決める(つくる)のは誰か？							
20	学外で活動をする時の移動方法やアクセス方法を検討するのは誰か？							
21	学内・学外の施設を借りるのは誰か？							
22	その他							
23	その他							
24	その他							
25	その他							

※書き終えたシートは、全員にコピー・配付し、保管しておきましょう(みんなが確認できる場所などに掲示するのも良いでしょう)。

※翌年度においては、現在のシートを確認しながら作業を進めると効率的です。前年度、生徒・部員だけで解決できなかった課題を把握して、あらためて検討・議論してみましょう。

④上記の他に、部活動内で共有しておいた方が良いことなどがあれば、メモとして残しておきましょう！



## 引用・参考文献

- ・ 神谷拓 (2015)『運動部活動の教育学入門』(大修館書店)
- ・ 神谷拓 (2016)『生徒が自分たちで強くなる部活動指導』(明治図書)
- ・ 神谷拓 (2017)『対話でつくる教科外の体育』(学事出版)
- ・ 神谷拓 (2018a)「部活動の存在理由―学校、子ども、教員の観点から―」(日本部活動学会『日本部活動学会研究紀要』 1・45-55)
- ・ 神谷拓 (2018b)「部活動の自治と学びを可視化する―クラブと部活動をつなぐ―」(日本部活動学会第1回研究集会(基調報告))『日本部活動学会第1回研究集会要旨集録』)
- ・ 神谷拓 (2020a)『僕たちの部活動改革―部活自治 10 のステップ』(かもがわ出版)
- ・ 神谷拓 (2020b)『部活動学―子どもが主体のよりよいクラブをつくる 24 の視点』(ベースボールマガジン社)
- ・ 神谷拓 (2020c)「コロナ禍で問われた運動部活動の『5つ』の課題」(『体育科教育』 68 巻 8 号・24-27)
- ・ 佐々木玄 (2018)「運動部活動における自治集団活動の傾向と課題―中学校・高等学校への質問紙調査―」(2017 年度・宮城教育大学卒業論文)
- ・ 塩竈市教育委員会 (2018)『平成 29 年度宮城県教育委員会 学校現場における業務改善加速事業 部活動の在り方及び部活動の指導体制づくりに関する実践研究 実践研究報告書』
- ・ 塩竈市教育委員会 (2019)『平成 30 年度宮城県教育委員会 学校現場における業務改善加速事業 部活動の在り方及び部活動の指導体制づくりに関する実践研究 実践研究報告書』

## <謝辞>

本研究は、2020 年度関西大学若手研究者育成経費において、研究課題「ワークシートと映像コンテンツを活用した部活動の実践研究」として研究費を受け、その成果を公表するものである。本稿を執筆するにあたって、2020 年 7 月 5 日に開催された日本部活動学会第 3 回大会(新型コロナウイルス感染症の影響により、誌面開催)で報告した内容を加筆・修正した。実践研究の統計処理及び分析においては、宮城教育大学教育学部黒川修行先生からご助言をいただいた。この場を借りて、深くお礼を申し上げたい。